

令和8年度 校内研修実施計画

I 研究主題及び教科

主題	自らの学びを調整できる子ども ～単元を見通し学び進める授業を通して～
教科・領域	算数科

II 主題設定の理由

1 これまでの研修の経過

本校では、令和7年度から「自らの学びを調整できる子ども～学習者主体の授業を通して～」という主題で研修を行ってきた。その結果、意図をもって選択した学び方を、自分なりにふり返し、評価していくことで、次の学びにつなげる子どもの姿がみられた。各学年が算数科の授業において、発達段階に応じた手立てを講じ、年間を通して研修主題を意識して、授業を行うことができたのは、大きな成果となった。一方、子どもが単元全体の見通しをもって、学びを進めることについては課題が残った。

以上のことを踏まえ、昨年度までの研修で学び得たことを引き継ぎつつ、今年度は主題を「自らの学びを調整できる子ども～単元を見通し学び進める授業を通して～」とし、単元全体の見通しをもって、自ら調整しながら学習していく力の育成を目指す。その単元で、どのような力を身に付けたいのか子ども自身が自覚するとともに、ふり返しを通して、自らの変容に気付き、次なる学びへの意欲につなげられるようにしたい。また、そのためにも「わからない」を受け入れられる安心感のある学級づくりを進めていきたい。

2 次期学習指導要領とのかかわり

文部科学省「教育課程企画特別部会論点整理（令和7年9月25日）」では、次期学習指導要領に向けた基本的な考え方について、「『主体的・対話的で深い学び』の実装」「多様性の包摂」「実現可能性の確保」を柱に、「多様な子供たちの『深い学び』を確かなものに」することを大きな方向性として示している。また、その実現のために「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実」「効果的な指導計画・授業方法」「児童生徒の学習方略の指導」の大切さについて述べられている。

昨年度から本校で大切にしてきた学習者主体の授業は、これらの基本的な考え方に矛盾するものではなく、方向性に間違いはない。しかし、最も大切な「深い学び」の実現には、より一層の授業者の教材理解が必要である。単元を通して、指導者だけでなく子どもも見通しをもって、学び進めていけるような授業を目指して、研修を進めていきたい。

Ⅲ 研修内容及び方法

1 今年度の研修について

(1) 研修構想

【学校教育目標】

自ら学び、ともに考えようとする子どもの育成

【主題】

自らの学びを調整できる子ども～単元を見通し学び進める授業を通して～

【目指す子どもの姿】

- ・ 学ぶ目的や意図、ゴール像を理解して学び始める子ども
- ・ 意図をもって学び方を選択し、学び続ける子ども
- ・ 自分自身の学びをふり返り、次の学びにつなげられる子ども

【主な研修内容】

- ① 単元を見通し学び進める算数科の授業づくり
- ② 学びの基盤づくり

(2) 研修内容について

①単元を見通し学び進める算数科の授業づくり

自らの学びを調整できる子どもを育成するためには、学ぶ目的や意図をもって学び方を選択できる機会を保障することが大切である。子どもに学ぶ目的や意図をもたせるために、今年度はパフォーマンス課題を活用する単元設計に取り組みたい。パフォーマンス課題とは、学んだ知識・技能を総合して活用し、思考力・判断力・表現力を発揮することができる課題である。具体的には、論説文やレポート、絵画、展示物といった完成作品やスピーチやプレゼンテーション、実験の実施といった実演がある。算数科においては、それらに加えて、ゲームや問題作りも考えられる。なお、伊勢野¹はパフォーマンス課題を作成するにあたり、次の2点を意識すると述べている。

- ・ 本単元でつけたい力を可能な限り網羅すること。
- ・ 実社会の場面に即した内容を可能な限り設定すること。

このようなパフォーマンス課題を、単元のはじめに提示し、子どもたちと何ができるようになればよいのか、ゴール像を共有する。そうすることで、子どもたちは、単元を見通して、学び進めることができると考える。その上で「課題把握」「課題解決」「整理分析」「ふり返り」の4つの場面で学び方を選択させる。さらに選択させた学び方を、自分なりにふり返らせ、次の学びにつなげさせていきたい。

¹ 伊勢野 2025 『『深い学び』の実現へ向けた授業づくり』 鈴鹿市教育委員会

②学びの基盤づくり

・授業の時間設定について

授業の始まりは、チャイムと同時に日直の号令によって始業する。授業の内容によって「課題把握」「課題解決」「整理分析」「ふり返し」といった各場面に、どの程度、時間を設定するかを事前に考えておく。子どもに最もさせたいことに多く時間を設定することが基本となる。授業の終わりは、チャイムと同時に日直の号令によって終業する。終業後には、授業の片付けをしたり、成果物を提出したりする。指導者も子どもも時間を意識し、授業の延長はできるだけないようにすることが大切である。

・授業中の指示や発問、言葉遣いについて

指導者は子どもが安心して学ぶことができるように、適切な言葉遣い、声量を心がける。指示や発問は、明瞭・端的にし、できる限り繰り返しを避ける。指導者と子どもとの関係性から、「～してください。」といった言葉ではなく、「～しましょう。」といった言葉が適切である。また、全ての子どもを公平に扱うという意味から、子どもによって呼称を変えず、「～さん」として統一することが望ましい。さらに、指導した学習用語を指導者が正確に使うことで、子どもに定着させていきたい。

・「めあて（共通のめあて）」と「ふり返し」について

授業のはじめには「めあて」を提示する。主体的に学習に取り組める内容になっているか、見通しが明確になっているかを意識して、子どもとともに設定する。そのためにも、その授業で付けたい力を明確にしておくことが大切である。授業の終わりには「ふり返し」を行わせる。自分自身の学びをふり返るために、「わかったこと」「もっと知りたいこと」といった学習内容だけでなく、「どんなことに気を付けて学習したか」「どのような学習方法を選択したか」といった学習過程もふり返っていくことが大切である。

・板書について

めあてや課題、子どものつぶやきや考え、まとめやふり返しを黒板に書き留めていく。全ての事柄を板書すると情報量が多くなるため、端的にまた構造的に板書することが大切である。ただし、子どもの考えは正答、誤答に関わらず大切であるという意味でできる限り板書する。また、色を使い分ける場合は、色覚に特性のある子どもに配慮する。ある程度、それぞれの内容の書く位置を決めておくと、子どもが学習内容を把握しやすくなる。授業の終わりに、ひと目で授業をふり返ることができるような板書が望ましい。

・安心して学習できる学級づくりについて

学習者主体の授業を実現するために、安心して学習できる学級づくりが大切になる。そのためには、仲間の話を最後まで、関心をもって聞こうとする態度の育成、お互いの考えや思いを尊重する態度、仲間の考えから学び、自分の考えを深めていこうとする意識など、さまざまな側面を学校生活全般において育てていく必要がある。まずは指導者が手本となって示しつつ、子どもとともに学級づくりを進めていくことが大切である。人権教育担当とも連携して、取り組みを進めていきたい。

IV 研修内容及び方法

1 授業研究の実施

事前検討、研究授業、事後検討を全ての教員で行う全体研と、一部の教員で行う部分研を行い、授業力を高める機会とする。全体研は4つ（1・5年、2・6年と専科、3・4年から少なくとも1つずつ）行い、部分研は3つ（残りの学年と特支）行う。教科は算数科とする。ただし、全体研の1つは人権とし、教科は問わない。特支も教科は問わない。

2 研修日程

学年	指導案執筆者	日程	単元・題材名
1年生	田尾玲子	9月 日	算数科「わかりやすくせいりしよう」
2年生	西場早利奈	9月 日	生活科「わたしたちのまち（人権）」
3年生	杉本啓聡	10月28日	算数科「円と球」
4年生	山田美紀	1月 日	算数科「面積のくらべ方と表し方」
5年生	岡崎楓奈	10月 2日	算数科「図形の角」
6年生	中川敬	6月26日	算数科「分数÷分数」
特支	谷口みゆき	12月 日	生活単元学習「ほほえみサーキット」

3 校内研修の内容

日程	内容（提案者）	備考
4月10日	・令和8年度校内研修実施計画について（中川） ・研究授業学習指導案の形式について（中川）	
4月24日	・学力調査・みえスタディチェックの採点（中川）	
5月28日	・人権レポートについて（谷口）	
6月 9日	・研究授業事前検討（6年生）	
6月22日	・演習「パフォーマンス課題の作成（仮）」（中川）	
6月26日	・研究授業事後検討（6年生）	
7月23日	・学力学習状況調査の分析（中川）	
9月 日	・研究授業事前検討（5年生）	
10月 2日	・研究授業事後検討（5年生）	
10月 日	・研究授業事前検討（3年生）	
10月28日	・研究授業事後検討（3年生）	
2月 3日	・みえスタディチェックの採点（中川）	
2月17日 （職員会議）	・みえスタディチェックの分析（中川） ・研修のまとめ（中川）	

引用・参考文献

- ・ 文部科学省（2025）「教育課程企画特別部会論点整理（令和7年9月25日）」
- ・ 伊勢野将吾（2025）『『深い学び』の実現に向けた授業づくり』